

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第46回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

十二年庚辰の冬十月に大宰少貳藤原朝臣広嗣の謀反して軍を  
発せるに依りて、伊勢国に幸しし時に、河口の行宮にして内  
舎人大伴宿禰家持の作れる歌一首 (巻第六 一〇二九番歌)

河口の野辺に廬りて夜の経れば

妹が手本し思ほゆるかも

時は天平十二年十月。大宰少貳藤原広嗣が謀反を起こして軍をあげたことに伴い、聖武天皇が難を避けて伊勢に行幸された折りに、河口の行宮で大伴家持が作った歌である。その同じ地に碑が建っている。三重県一志郡白山町医王寺。弥五郎坂を上ると、眼下に町が見下ろせる。家持はその時、舎人の最高位で幹部候補生であった。この行宮で、家持は何を思ったのだろう。人は人を信じ、裏切り、策略と攻防の中で歴史が動いていく。上手くいっているようでも、望月の世などあり得ない。満ちて欠けてを繰り返し、翻弄されてまた夢の跡となる。

十日間の滞在の間に広嗣斬殺の報告を受けた。命を受ければ、任があればどこへでも行かねばならない。どこへ行っても自分もどるべき所、包んでくれるやさしい手枕を想う気持ちは変わらない。戦は敵のみならず。もう戻れないかもしれないという自らの大きな不安と戦いながら一人眠る夜は、妻のことを思わずにはいられない。「なんで、たたかっているの。」



テレビの映像に四歳の素朴な疑問が投げられる。信じるものが違うから、愛する人を守るため、何を言っても「なんで」は消えないだろう。「なぜかな」と悲しい顔を見せることしか、今の自分にはできなかった。

碑を訪ねてまわるのは楽しい。一人で宮のあった丘に立って村を見下ろしている、隣に歴史上の人物が立っているような気がする。確実に時は流れている。けれど、古の人の思いは確かにその地に残っている。そして、行くべき道を教えてくれるような気がする。人の世の儂さと、先に進む力と、変わらぬ人の思いとを。

